

179

¹²³I-MIBGによる正常副腎の描出の検討
—第2報—

大日方研、鈴木健之、宮前達也(埼玉医大 放)
木下信一郎(同 2内) 牛山正行、柏原秀之、
片山茂裕(同 4内) 西村克之(茨城県立医療大)

交感神経心筋イメージング製剤として開発された¹²³I-MIBG(222MBq投与)を用いて副腎シンチグラフィを施行した。対象は副腎腫瘍を有さない症例で、ボランティア6名、高血圧患者8名である。¹²³I-MIBG静注24時間後像における副腎の描出の程度を4名の核医学者により視覚的判定し、尿中カテコラミン(アドレナリン、ノルアドレナリン、ドーパミン)値および血圧測定値との相関について検討した。その結果、副腎の描出と尿中カテコラミン値、特に尿中アドレナリン値との間に正の相関があることが示唆された。

180

Tc-99m MIBIによる副甲状腺腫瘍の描出

山口晴司、日野 恵、伊藤秀臣、大塚博幸、檀 芳之、才木康彦、太田圭子、尾藤早苗、増井裕利子、池窪勝治(神戸市立中央市民核) 梶川麻里子、小林宏正、石原 隆、森寺邦三郎、倉八博之(同内分泌内)

臨床的に診断の確定した副甲状腺機能亢進症15例においてTc-99m MIBIによる副甲状腺腫瘍の局在診断の検討を行った。撮像は投与直後、20分、1時間、2時間後に行った。15例中13例で明らかな病変の描出がみられたが、2例では検出出来なかった。9例で手術が施行され8例で診断部位の腫瘍が摘出されたが、シンチグラフィにて陰性であった1例では手術でも副甲状腺病変は確認出来なかった。6例は種々の理由により経過観察中である。Tc-99m MIBIによる副甲状腺シンチグラフィはCT、MRI、Tl-201-Tc-99m pertechnetate subtractionよりも検出率に優れ有用な検査法であると考えられた。

181

一次性副甲状腺機能亢進症再発例における

^{99m}Tc-sestamibi(MIBI) SPECTの有用性の検討

高田香織、日下部きよ子、金谷信一、小林秀樹、牧正子(東女医大放)、小原孝男(東女医大内外)

高Ca血症を伴う一次性副甲状腺機能亢進症再発例におけるhyperfunctioning parathyroid tissue(HFPT)の局在診断は重要である。今回我々は、過去2年間にMIBI(600MBq)SPECTを施行し、腫瘍摘出術が行われ、組織診断の得られた11例について検討した。疾患の内訳は副甲状腺癌リンパ節転移3例(6腺)、腺腫4例(4腺)、過形成4例(5腺)でいずれも術後高Ca血症の改善を見た。摘出されたHFPT15腺中14腺でMIBI陽性だった。1例で骨への集積増加を認めたが、肋骨のosteofibromaであった。

MIBI SPECTはsensitivityが93.3%と高く、HFPTの検出に優れたイメージ法であることが示唆された。

182

結節性甲状腺腫における²⁰¹Tlシンチグラフィと穿刺吸引細胞診の比較検討

奥村能啓、清水光春、佐藤修平、中川富夫、新屋晴孝、竹田芳弘、平木祥夫(岡山大 放)

結節性甲状腺腫39例(良性20例、悪性19例)に²⁰¹Tlシンチグラフィと穿刺吸引細胞診(以下、細胞診)で良悪性の鑑別の有用性を検討した。²⁰¹Tlシンチは静注10分後の初期像と120分後の後期像を視覚的に評価した。²⁰¹Tlシンチは正常部より高集積な場合、細胞診はクラスIII以上を悪性と診断した。sensitivityは²⁰¹Tlシンチ初期像、後期像、細胞診で各々70%、60%、55%であった。specificityは各々57.9%、84.2%、94.7%であった。accuracyは、²⁰¹Tlシンチ後期像と細胞診は各々71.8%、74.4%ではほぼ同等であった。²⁰¹Tlシンチグラフィは、細胞診と同等に良悪性の鑑別に有用であった。

183

橋本病及びバセドウ病におけるリンパ球浸潤の核医学的評価

久山順平、太田正志、松野典代、今関恵子、宇野公一(千大放科)、内田佳孝(千大放部)

橋本病患者5名、バセドウ病患者5名に対して、FDG-PCTとIn-111標識リンパ球シンチグラフィを同時期に行い、リンパ球浸潤の寄与を評価・比較した。橋本病では、全例FDGの高集積を呈した部位に一致した標識リンパ球の集積が見られ、第35回総会において報告した、橋本病におけるFDG高集積=糖代謝亢進の主体はリンパ球であると考えられた。一方バセドウ病では、甲状腺へのリンパ球の浸潤は、予後・治療への抵抗性に関わる因子であると考えられ、その評価を意図したが、制御不良でI-131治療計画中の5例共、甲状腺への標識リンパ球の集積・FDG集積の上昇は認められず、末梢リンパ球の遊走、activeなリンパ球の存在は証明されなかった。

184

甲状腺機能亢進症におけるアイソトープ治療後の抗Tg抗体、抗TPO抗体ならびにTSHレセプター抗体の変動

山口伸之、青山 昭、名執由起、日下部きよ子、出村黎子(東京女子医科大学病院)

アイソトープ治療の自己免疫機序への影響を検討するために治療後、継続的に抗Tg抗体、抗TPO抗体、およびTSHレセプター抗体の測定を行った。治療後3ヶ月ではいずれも治療前に比較して有意($p < 0.05$)に高値であったが、治療経過に伴い低下する症例を多く認め、治療後1年ではいずれも治療前に比較して有意差を認めなかった。治療効果により、euthyroid群およびhypothyroid群に分類し比較検討を行ったが、両群に有意の差は認めなかった。アイソトープ治療後3ヶ月目にこれらの抗体に認められた一過性の上昇は、甲状腺の破壊に伴う抗原流出による免疫反応の増強を示唆するものと思われた。